

昭和四十四年一月

郷土資料

神田明神及び將門の首塚

越谷市郷土研究会会長

大野伊右衛門

目次

神田明神について考えること

将門は忠臣か逆臣か

神田明神とは

徳治延慶時代の地図 武藏国（駒指）

当時の海だった処 埋立事業と家康

将門の伝説関係所在地と其の教

将門と平家一門の系譜懸説

将門時代の一門配属情況

将門の首塚のこと

現在地点（地図参照）

一頁

二頁

三頁

四頁

十頁

十二頁

平将門について

郷土研究会長

大野 伊石 翁 門

湯島台にある俗祿神田の明神様について私は常に考えているのであります。それにつけても先づ「平将門」の事を、思い出すのであります。

○ 平将門は逆臣であつたか、將又忠臣であつたか。と云うことであります。

私は忠臣であつたと思つてゐる。前に説つてゐる詔嬢倭祓の「オベツカ」共が該の詔嬢・契知を猜み罪回がつて将門の功をねたみ、都の右共が時の帝に有ること無い事讒言申し上げたのが記録に残つてゐるので、それが事實のように伝えられた。

○ 宇佐八幡宮の古い右の神主、祖氣清磨は逆臣が忠臣か

○ 南朝の忠臣楠正成は南朝の忠臣だが北朝から見れば逆臣であつたろうし

共に天竺系から見れば忠臣であつても、時の権力者共からは逆臣と呼ぶだらう。亦自分勝手に見れば

は逆臣にも当るだらう。こうした際に臣下万民こそ克く知つてゐる正逆である。」ということ事は何時の時代でも同じである。

※ 今も湯島様の入口の池の畔に釣殿の平舎があり常に茲にてウサ職した、そのための釣をされ居つたと伝えられているのを見ても、如何に官中の裏面生活が狂瀾しておつたかを想像することが出来ませう

○ 此の眞偽は時の権力者には触れない。生残りの各自が個人的に總が手伝つて正逆を、時の天下にオベツカ使つて破けるからである。爾ち、國家社取の利害をかまわず利己的に考ふるからである。そう言う時に「おかめ八回」万民こそ克く公平に知つてゐるのである。

平将門公の歿後、追害を吐かれて

○ 天慶の乱を他所に見て、常陸の岩村町の神田山に埋められたが、後一族によつて嵯峨の「有塚」

に甘と明とを一所にして葬られた。尙は天慶三年二月十四日であった。祭典は九月十五日である。

さて、後古話の眞偽が（正送）解かり、聖武天皇の天平二年に神孫として祀られたのであるが、現在の神田明神の紋が流れ巴になつてゐるのは？安房の國の漁民が安房神社の御分靈を奉待して現在の六手町附近に居住し安房神社を合祭したからである。その為、紋が同じであり、而も將門の一族も庇護された訳である。

◎ 眞偽が解らないが天曆四年（九五〇年）九月將門塚が鳴動し、暗夜に光を發し而も將門が出現したと伝えられた。社は現在の九段中坂の世経稲荷神社の境内にある。

◎ 祭主明神であるが、明神には衣冠束帯の將門公の木像が御神体として安置されてある。本將門の首桶と称する銅製六角形の桶の模倣のが御神体室としてある。

「当時の地圖として残されてゐるものを写してあるが次頁に参考のためかかげ當時を偲ぼる」

明神には当時の畧圖があるが、畧説を加えない

○ 徳治、延慶年間頃の江戸、註圖面である。

当時 利根川水系は 荒川（秩父からの流れ）

至今の春日部と下町久里辺り、四丁野、三丁野

を通り、八條汐止水神を入田川を併流し江戸湾

へ流れた。

※ 当時駿河台は相当の山脈で「神田山」と称した

日輪寺も「神田山の輪り寺」と称して居った。

※ 今の飯沼橋、九段下、三崎町、神田の町廻りは「入道」だった。

※ 勿論、今の宮城下は海で、凡の内々、日本橋

京橋辺は碇泊の中であつた。

※ 下谷の鳥越は、とびこえの詔りで、將門の首

がとびこえた山であつたと伝えられる。

神田明神の語義

。神田明神とは（神田山）とて首のない「祖」の

綬だそうである。

序に、駿河名は、慶長八年（一六〇三）頃は今の

畧空、新橋辺りは海であつたのを埋立てる為にと

の山を崩してこれをならしたので、此の時から山

は平になつてしまつたと伝えられる。（三五五年前）

延因 ↓ 菅原藤原道長の後胤 眞承上人が柴崎村に立寄ったのは、嘉元元年（一三〇三）年であり、頼朝が鎌倉に幕府を開いてから百年目である。建武中興の前約三十年、北条師時が治政の時であった。さしも風勢を張った「江戸氏」も漸く衰え始め、荒れ果て、住民は疫病に苦しむ。当時これ頼朝公の祟りなりとして、蓮洞跡陀仏の法号を遺贈し塚を修復、供養した事があります。

本徳治二斗（一三〇七）更に秩父の書石造等に刻み之を建立し、更に延慶二年（一三〇九）安房神社の相殿にも頼朝公の靈を合祀合祭した。そうして之がまた神田明神と改称するに至った。この事は浅草の芝崎町日輪寺の日記録にあるのです。

参考

頼朝の伝説及関係伝説所在地

上段は 当該県内に於ける数字は 数
下段は 副書地名は 重要遺跡 地名

頁の他 註と見ること

宮城縣 二所 岩代
徳島縣 一ヶ所 相馬野馬追い
外四ヶ所 福島縣 宍日志 岩城

栃木縣 一ヶ所 石井の趾跡を始め 下野
茨城縣 四ヶ所 福島縣の一部を含む。 常盤

千葉縣 三ヶ所 安房・上総・下総
結鏡原、七天王塚、平親王塚

東京府 三ヶ所 府門山、一 神社、一 武蔵國
埼玉縣 二ヶ所 神社、一（秩父神社）

長野縣 一ヶ所 信濃國分寺 信濃國
山梨縣 六ヶ所 和田鎮守 甲斐國

神奈川縣 三ヶ所 首塚（武蔵國） 武蔵國
縁故深い土地であるが

埼玉と神奈川を 三ヶ所
千葉縣 三ヶ所

茨城縣 四ヶ所 三縣一府即ち
東京府 三ヶ所 武蔵國では

合計 六三ヶ所

三縣一府即ち 武蔵國では

合計

六三ヶ所

三縣一府即ち 武蔵國では

東京

- 神田明神 東京都千代田区外神田
- 總領守(一)は有名神田区日本橋区
- 将門神社 東京都西多摩郡古里
- 筑土神社 東京都千代田区九段
- 鑑神社 新宿区 柏木
- 鬼王神社 新宿区西大久保
- 将門神社 港区 芝三田
- 将門明神 南多摩郡上野方村

全国各地

国中に祀られてる神社としては 拾七社

- 岐阜県 五ヶ所
- 滋賀県 七ヶ所
- 静岡県 一ヶ所 十九首
- 愛知県 八ヶ所 大福田社
- 奈良県 三ヶ所
- 和歌山県 二ヶ所
- 京都府 一ヶ所
- 高知県 一ヶ所
- 広島県 一ヶ所
- 鳥根県 一ヶ所
- 愛媛県 三ヶ所
- 大和国 三ヶ所
- 紀伊国 三ヶ所
- 山成国 三ヶ所

- 以上 拾七社は何れも年々歳々大祭を行い、山車を出す有名な神社である。
- 将門神社 神奈川県小田原市
 - 国王神社 福島県相馬郡相馬中村
 - 和国神社 山梨県北都留郡相馬村
 - 神田明神 滋賀県 堅田市
 - 神田明神 広島県高田郡其比村
 - 将門明神 岐阜県 旗本町
 - 将門明神 静岡県 沼津市
 - 将門明神 愛知県 豊田郡 旗本町
 - 将門明神 奈良県 磯原郡 旗本町
 - 将門明神 和歌山県 太田郡 旗本町
 - 将門明神 京都府 宇治郡 旗本町
 - 将門明神 高知県 佐賀郡 旗本町
 - 将門明神 広島県 佐賀郡 旗本町
 - 将門明神 鳥根県 佐賀郡 旗本町

将門の首塚

外堀

NO4 高速度道

気象庁

支

労働省

国原

税

司庫

皇居
お堀

将門
の
塚

相互会社ビル
三井生命保険

日本橋
信用銀行

産業会館

丸の内消防署

日本鋼管

ホテル
パレス

神田橋
目路

至日比谷

葛原親王は天長七年（八三〇）と承和十一年（八四〇）の二回常陸の太守になった。但し遙授と云つて任地には赴任しない。

親王の子高見王は本の姓を賜り之を名束った。上総国介に任命された。その子高望王は始めて一族郎党をつれて東國に下つた。（寛平二年）

上総国では高望王の委任の七年間に国府所在地の市原郡の俘囚が大叛乱をおこしたので諸郡の兵千人を動員して断く鎮圧した。

第一に国内治安を維持するに力の、長子国香を国府に任わし鎮守や將軍の任に當らしめ二男良兼に東北隅の横芝に、三男良将（将門の父）を上総の西北亦下総の佐倉には四男良餘は東常陸の天羽に、五男良文は西方千葉に置置し四辺の要衝を固めた。

その頃の奥州蝦夷征服は主として常陸、下総、上総を担当し兵力を送り武器糧秣を補給し舟や筏民までも送つたもので、而も手備兵力を養ひ雑務に當らせた。所謂鎮守府將軍の役目を果した。

こうしている間に高望は二男良兼と六男良臣とぞれに国香の子貞盛（兼）は常陸大掾源護の女を

めとり、良將には下総国相馬縣有力者犬養香枝の女（後の将門の母）を娶りま亦地盤を固めた。良兼は源護から婿引出物として常陸国羽鳥に註園をもらい、他日息子が源護の後任として常陸を守り地固めとした。一方佐倉の良將は犬養氏の後継もあつて下総の葛飾にのり出し、国府を制圧して事實上の下総介となつてしまつた。同時に鎮守府將軍をも兼ねてしまつた。

延長十一年（九一一）高望は七十三才の生涯を閉ぢ、更に同十七年（九一六）には良將も死んでしまつたのである。それまで高望の力でささえられて居つた上総、下総の勢力のバランスが崩れ出してしまつた。

国香は父の跡目を継いだが、弟良兼は横芝にあつて凶につくのが弟良將の遺領とその官邸であるが、それに加ふるに良將の遺児たちは何れも若身だつた。中にも遺児の一人、将門公は京都にあつて留守居している。時は良しと良兼は神し出して良將の旧領をいすめとつてしまつた。

延長七年（九三〇）頃、源護は常陸大掾を平、國香にゆずり常陸大掾を中心に宏大なる莊園に立

籠り、現取時代の蓄積の富を守り、鬱然たる勢力を張つて居つた。

承平五年（九三五）此源護の息子三人が莊園の拡大を計画し、まず將門公の岳父（妻の父）平、真衡の領地を奪取しようとして、那羅になる將門公当時の相馬小次郎が小人故で盛出中を幸とし、今の明野町、昔の野本、原に遊撃したが反響にあつて三人の息子は或死、之に力を貸した常陸大掾国香までが傷を負つて死んでしまふと言ふ大事件に陥してしまつた。之が將門記の野本合戦であり、それ以来、平家一族の血を流す死闘が繰り返された。

更に国香の妹婿、常陸介藤原維茂の子、為房が將門公にねらいをつけ、常陸ノ国府官兵を利用し、攻め込まうとした。將門は先手を打つて之に逆襲した。その為國府（現在の今西市）は一掃りもなく潰滅してしまつた。（叛乱であつた）

時に、武藏権守興世王は盛かに將門と計つて、「今案内を授けるに、一國を討つと雖も公の責めは重からず、同じくは坂東を虜掠して暫く氣を見ようではないか、と」

將門 答えて云う「將門が念ふ処は實に之のみぞ

昔莊定の王子、天位に登らむと欲し、先づ子の

五つの頭を殺さば或太子は父の位を尊ばんと欲し

該の父を之重の獄屋に投じり、苟しくも將門は利

帝の苗裔三世の末葉なり、同じくは八國より始め

て兼ねて王城を虜掠せんと欲す。今すべからず先

ず諸國の印鑑を奪い、一同に受領の限りを宮堵に

迫り上げん。然即且つ掌に入冑を入れ、且つは腰

に万民を手なづけん」と言えり。大議院に訖むぬ

要するに自分は王族であるが一國を討つもハ國

を討つむ謀叛の罰罪は同じである。ソレならば、

関東を席捲して京都に攻め入り、万民を味方にし

て新しい國を造らう。と、而して忽ちと野、下野

を攻め國府を迫り、以て府を領して斤に入り

四門の陣を固め、且つ諸國の餘目を放つ処が時に

一人の一番伎あつて言へらくハ幡大菩薩の使なり

と懺り（口走り）朕が位を養子將門に授け給ると

ソノ位記ハ左大臣二位菅原朝臣表す者ぞと、尚ハ

幡菩薩の使なりと懺り、朕が位を養子平將門に授

け奉ると、その記位は左大臣二位菅原朝臣の靈魂

表す者ぞ、尚ハ幡大菩薩は八方の軍を起し、朕が

位を授け奉る。今須く田二相の管業を以て、之を迎へ奉るべしと、茲に將門頭を擧げて、其の如く、況んや四陣をゆ、擧げて立ち、敏び、千、併て伏拜す。又武藏守并に常陸掾藤原玄茂、其時、其の半人とせりて喜賀すること、貧人の富を得たるが如く、怪も變化の術を歎きたるが如く、ここに於いて自らも、蓋号を製、美し將門を名づけて新皇と曰ふよつて事の由を述すと。

只々妖しき巫女の言葉に依つて、將門は新皇と衆るようになったが、サテ茲に菅原道真の靈魂が現はるところは、眞に興味深い芝居じみであるが、本人には解らぬ。

ついで、新皇は文武百官を殺し、王城を建てることになり、これが後世の相馬の偽宮と呼ばれるものであるが、新皇は統いて相模、武蔵を廻廻つたところ、諸國の国司はその威勢に恐れおののいて國の印や鏡を差出して京都へ逃げて帰つてしまつたので、またたく間に、下野・上野・常陸・上野下総、安房・相模、伊豆の坂東八ヶ國を掌に納め、氣洋々と下総の本根に凱歌した。

この新皇を擧げた京親の朝廷は今にも新皇の軍隊が攻め上つて来るのではないかと上を下への大騒動となつた。

「こんなことを仕出かさないければ逆臣とは言われなかつたものを。尤も悪いのは自分こそ新皇と殺し、あがめさせた事だ、之では「逆賊」と言われても致方あるまい」

然れども天は之を許さず、託鹿の野に饑い、暗に神鏡に中り、怒り未雲の人をよせて、長統の頸を刎ねた。時に天娶三年將門・三十八才」ところをいっている。

当時我國の人口は六百万人位と言われている。坂東には二、三千万の人口であつた。

（今日の越谷と草加と合併した人口位）
平家の始祖「平高望」が上總介に任命され、坂東に下つてから僅かに勢力を得て莊園を作り、其の子孫に分ち、父子、兄弟相殺い、醜い争奪をくり返したのも民衆からの反奮に泣かされたのも、この善付のない生活に山河の耕作は荒れる一方であつたろう。

首塚のこと

天正十八年（一五六〇）八月一日、關東八ヶ国の領主となった徳川家康は、旗下の將兵全數に白帷子を着させ江戸城へ来たんだ。之を俗に八朔の江戸討入りと言つてゐる。この日を記念して爾来「

「徳川時代に放ける重要な祝日」とされていた

家康の最初目に映つたの相は、東方は一面の茅野、西次の入江、侍屋敷の割付ける余地もない。苜蓿は見限す限りの原野、附近に百戸ばかりの柴崎村があるばかりで、第一に困つたのは三河から引算して来た家來の屋敷地である。

類の毒であつたが柴崎村の住民を移住させソコ、侍屋敷を作らせた。これが

「鐵草堂・高野の由来」である。

この下世家と神社と寺とがあつた。二社を殆ど廻り廻るを命じた。

その神祇の流儀を更に掲げ参考にしたい。

神田明神は 神田山へ、神田山の日輪寺は漢草の芝崎河へ

平河山の本住院は今の本所へ、而して法恩寺と号した。

平川山の三峯院は上野の山下へ、養玉院と称した神田明神の首塚は移転は出来ないで、屋敷地として与えた。土井利勝に管理させた。

家康が征夷大將軍となるに及んで、江戸の終鎮母として、亦江戸城の表鬼門の守神として神田山湯島台に御遷座させた。

續いて元和二年（一六一六）二代將軍秀忠公は（米源兵江重勝に命じ壯麗なる社殿を造営され、此時から柴崎氏（平沼門公後裔）が神主としてお守りすることになった。而して山玉権現をも兼務した。

徳川家が神田明神を尊崇したについては、次ぎの語がある。家康の先祖、世良田親民が鎌倉の北條に背いた後、信州で歳入の悲嘆を嘗めて届つた時、真教上人に会い祈禱し誓願と号したが、或時

